

第119号

親 諭

宗祖真盛上人が、比叡の山にて二十年以上の佛道修行の後、衆生済度のために西教寺に入寺されたのは、文明十八年（一四八六）のことでした。

爾来、西教寺は真盛佛法の根本道場として、その教えを今日に伝えております。なかんずく、無欲清淨にして阿弥陀佛を讃嘆し、阿弥陀佛が建立された浄土への往生を願う専勤念佛は不断念佛として五三〇年以上絶えることなく、日々、戒光山に本霊しています。

そして、元禄七年（一六九四）に七萬日法会が修せられたのちは、一萬日毎に、時の祖師たちは「萬日法会」を修し、その都度、真盛宗風に新たな息吹を注いでこられました。

そのような法油の継承の中で、十九萬日大法会は、緇素挙げての大誓願が熟して、いよいよ二〇二一年に嚴修されることとなりました。そして、その大誓願とは、とりもなおさず、本宗檀信徒のひとりひとりが真盛上人のみ教である不断念佛を領解し、体解しその念佛三昧に浴したいとの願いであります。

もともと、真盛上人が始められた不断念佛は、天台大師や恵心僧都の念佛修行の教えの中から感得されたものであり、それは、衆人が多念する昼夜不断の別時念佛でありました。しかしその後、この不断念佛の語は常念佛の意味とも受け取られています。

そして、その念佛の旨趣は、自らを含め十方群類の来世往生を願いつつ無病息災等の現世での平和な生活を祈るものです。

私たちは、今、あらためて真盛上人のみ教を心に刻み、十九萬日大法会に値遇せんことを渴仰し、本願と道心を包摂する不断念佛（常念佛）を歩々声々念々として、阿弥陀佛の無量の光明に攝取される法悦の日々を送りたいものです。

総本山西教寺第四十三世

大僧正 真 魯

念佛とは

伊賀教区西蓮寺山主 武田 圓龍

新年あけましておめでとうございます。
皆様方には清々しい初春をお迎えいただいたことと感謝いたします。

さて、正月に念佛を唱えることは良くないとして、正月には念佛を唱えない地方があるそうです。

しかし、「御忘（おんわすれ）なきばかりが念佛」と、真盛上人がおっしゃってられますように、私たちは日々、忘れることなく念佛を唱えたいものです。

もともと、念佛とは何でしょうか。「念」とは、「今」の「心」と書きます。ですから、今、現在、この時に心に深く信じて崇めることです。「佛」といえば、私たちの宗では阿弥陀佛を最も大切な佛として崇めます。そこで、念佛といえは、「佛」を「念」ずること、すなわち阿弥陀佛を今、現在、この時に心に深く信じて崇めることです。どうしたら、阿弥陀佛を深く思うことができるのでしょうか？阿弥陀佛は色身無量と言って、私たちに想像できないほどの大きなので、なかなか心に思うことができません。

そこで、平安時代の源信和尚は、阿弥陀佛の白毫相という相好（佛が持つ優れたお姿）を思い浮かべなさいと勧めています。これは、阿弥陀佛のお顔の眉間（みけん）からとてつもない大量の光明が流出するというお姿です。この光明は七十億五千六百万であり、それは、太陽と月が一度に何百も出たような明るさです。

この時、念佛する私たちの目には白毫相の阿弥陀佛と、十方の世界に満ちあふれた金色の光明だけが見えるのです。このように心に深く信じて、「南無阿弥陀佛」（阿弥陀様、お頼み申し上げます。）と唱えれば、私たちは阿弥陀佛の光明の中に攝取され（おさめとられ）、決してお捨てにはならない、と、お経に説かれています。

したがって、御親諭に諭された真盛上人の不断念佛とは、日々、無量の光を放つ阿弥陀佛を今の瞬間瞬間に心に深く信じ、すべての衆生と共に往生できますようにと、菩提の心をおこして仰ぎ、「南無阿弥陀佛」と唱えることと拝察します。

別派独立と

萬日法要

その1

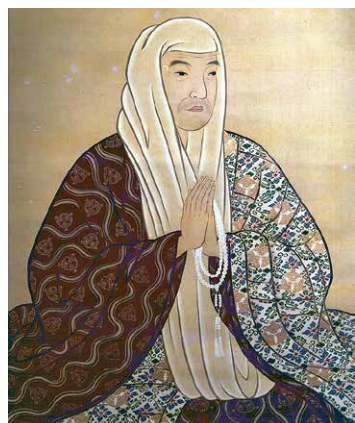
1. はじめに

本宗は四年後に不断念仏相統十九萬日大法会を迎えます。この五百年余の称名相統は、宗祖真盛上人の教えの尊さと、教えを受け継いできた先人のたゆまぬ精進の賜物でしょう。その中に、明治初期における天台宗からの別派独立は、時の西教寺三十世真朗上人が中興上人と称されるように、とりわけ大きな意味を有する出来事です。今改めてその意義を振り返ります。

2. 別派独立の意義

東京都小池知事が豊洲・築地の市場移転問題の打開策を打ち出すに際し、アウフヘーベンという語を用い、一時この言葉が評判になりました。「矛盾・対立する概念を、より高いレベルで統合・融合させる」を意味するドイツ語ですが、実は本宗にとっても無縁ではない言葉です。それは、真盛上人の教えを象徴する「戒称二門」、その戒と称の関係性についてアウフヘーベンという語で説明されることがあるからです。

今日私たちは天台真盛宗として、そうした体系的な教学を有する一宗を形成しています。教学の体系化は別派独



真朗上人御影

立後に一気に進んだものですが、それは別派独立の目指したものに起因します。元々西教寺門末は天台宗内にあって盛門と称され、永く独立した歴史を形成してきました。それが敢て別派独立への道を選んだのは、組織の独立を通じて真盛上人の教えを宣揚し、真盛一門としての誇りを得ること、つまりはアイデンティティの確立に意義を見出したからに他なりません。

そのことは別派独立に至る経緯に覗うことができます。明治九年、伊勢西来寺において天台宗赤松管長が真盛上人の教えを「異安心」とする説教を行いました。それに対する門末の大反発が沸き起こり、それが端緒となって一気に別派独立運動へと発展したのです。

その先頭に立ったのが真朗上人です。そして明治十一年の独立後、真朗上人は本宗の初代管長としてアイデンティティ確立のため様々な施策を提起します。今日に至る萬日法要も実はその施策のひとつです。

真盛上人往生伝記にふれる

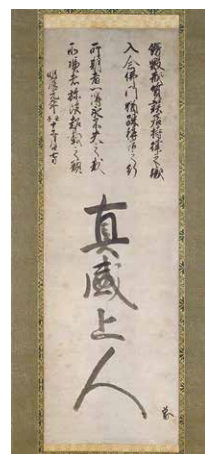
第4回
自らを省りみ、
身を正して念仏する

明けましておめでとうございます。平成三十年を迎えましたが、天皇陛下から皇太子さまへの御譲位について昨今、国会を中心に議論がなされています。今から五百年近く前の室町時代後期、真盛上人は御土御門天皇とその御息である皇太子 勝仁親王に戒と御十念をお授けになられました。御土御門天皇が「真盛上人」と勅筆され、勝仁親王が四句からなる詩を親筆された御軸が総本山西教寺に今も伝わっております。その御軸に書かれた四句の詩は、真盛上人が身を正し怠ること無く念仏修行を続けるために、ご自分に言い聞かせた言葉であり、『真盛上人往生伝記』にも収録されています。

毀戒の質を飾りて誤って持律の職に居し、念仏の門に入りてなお、称名の行を疎にす。

期するところは「一得永不失の戒。憑むところは弥陀兆載劫の願。」

試みに現代語訳するなら、「私は」戒を破ってしまうような身でありながら戒を保つべき立場につき、念仏修行を志しておきながら称名念仏（声に出して念仏すること）をおろそかにしてしまっている。「そのような私が一生をかけて保とうと」覚悟したのが「一得永不失の戒（一たび受ければ失われることが決してない



戒め）であり、「自らの身を委ねて」おすがりするのが阿弥陀さまがお立てになられ永い永い修行によって成就されたお誓い（四十八願のうちの第十八願において誓われた、全ての生きとし生けるものの極楽往生の願い）による救いである。」というようなところででしょうか。

ここで注目していただきたいのは真盛上人が自らを省りみられて、戒を守ることもできず、称名念仏の修行も不十分であるとお考えになっているところ です。「無欲の念仏聖」とたたえられた真盛上人ですらご自分の行いについて反省され、そのうえで戒を保ち念仏することに全身全霊で邁進すると、日々ところにお誓いになられていたということなのです。

私たちはどうでしょうか。日々の生活の中でうまくいかないことがあると、「私は悪くない」「私はやるべきことをやった」などというように考えて、うまくいかない原因を自分の外に探してしまうことが多いのではないのでしょうか。落ち着いた気持ちで自分の行動を省りみて、自分の心持ちを変えることにより様々なことが違った見え方をしてくると思います。

自らを省りみながら念仏することを絶やさなかった真盛上人にあやかり、私たちも自分の行いを反省し、身を正してお念仏をしていきましょう。

（文責 宗学研究員市川直史）

天台眞盛宗の雅楽 がく

④

今回は打楽器を案内します。

雅楽の打楽器は鞆鼓、太鼓、鉦鼓の三つです。

先ず、鞆鼓は円筒形の木をくり抜いた胴の部分の両面に皮を張った鼓を台座に乗せて二本の撥を使つて音を鳴らします。この楽器の奏者が一番の首席になるのが通例で演奏者の指揮者の役割を担います。

次に太鼓です。太鼓と言うと祭りの時に櫓の上などで勇壮に打ち鳴らす姿が連想されますが、雅楽で使用する太鼓（太鼓）は木をくり抜いた胴に皮を張るのは一緒ですが打面は片側だけ使用し獅子など美しい文様が描かれているのが特徴です。

次に鉦鼓です。唯一の金属楽器で台座に付いた円形の枠に吊り下げられています。御念仏の時に使用する伏せ金を吊るしている様な感じでしょうか、二本の撥を使って擦る様に鳴らします。

昔から鉦鼓は鞆鼓、太鼓と違い少し遅くずらして鳴らすのが良しとするのが面白いですね。次回は弦楽器を案内します。



日本天台三総本山合同法要

「天台三総本山合同法華三昧法要」

毎年行われている天台三総本山合同のイベントが、十月二十一日に比叡山延暦寺の大講堂で天津市観光協会協賛のもと執り行われました。

今回は、延暦寺、三井寺、西教寺にそれぞれ伝わる「法華三昧」という法要で、その源流は、およそ一四〇〇年前、中国の天台大師智顗が「法華経」に説かれる修行の方法を形にされたものです。私たちが、眼、耳、鼻、舌、身、意の六つの感覚器官で作りに上げてきた数多くの罪を懺悔し、洗い流して、清らかにする方法という意味で、法華経によって懺悔する方法「法華懺法」ともいいます。

この、眼、耳、鼻、舌、身、意の六根を懺悔することによって、心身ともに清らかにした後に、お釈迦様の言葉である「お経」を誦するものが、法華三昧法要の大綱です。この法要では、延暦寺、西教寺、三井寺の順で、それぞれの法儀にて唱えられ、特に西教寺の行法は、法華立経で誦読されました。

法華立経とは、江戸末期、延暦寺一山の求法寺から伊勢西来寺に晋山された第三十世眞阿宗淵上人が、比叡山における伝統的な法華経誦の再現を目指して山家本法華経という経本を開版され、その正しき法華経誦の実践方法として、上人自身が樹立された法式です。伊勢では今日まで西来寺千部会、成願寺千部会などで受け継がれています。

法華立経は次のような特色を有します。



一、法華経誦には木魚を使わず、經奉行四名の声に式衆全員が唱和します。

二、法華経一卷について二度、經奉行は内陣、余間、裏堂と本堂全体を巡って行道しながら誦読します。

三、行道の間は足の運びに合わせた緩読、本座に戻って座読に移るや徐々に速読と、変化にとんだ誦読を行います。

四、経本は折本ではなく卷子本を用い、手に捧げながら誦読します。

このように、法華立経の法式は、静的、単調な誦読行を、視覚的にダイナミックかつワイドに、そして音響的には変化にとんだリズムカルなものに変える演出が工夫されているといえます。

山家本法華経による伝統的な法華経誦の再現という上人の願いは、残念ながら比叡山において叶うことはありませんでした。しかし今回、延暦寺での法華立経の執行は、文字通り山家本法華経のお里帰りとして、上人への何よりの供養となつたのではないかと思います。

このように、毎年三本山では、趣向をこらしたイベントを執り行う予定ですが、是非皆様の御来山お待ちしております。

ご先祖様に手を合せ

戒称で心身を育む

西福寺 西澤 義博

森下典子著「日々是好日」に『お茶はねまず【形】なのよ。先に【形】をつくっておいで、その入れ物に、後から【心】が入るものなの」とあります。履き物をそろえると、心がそろうのと同じです。

ある檀家さんでは小学生の二人が両親や祖父母におもちゃなどをねだりに来ると、お仏壇の前に行つて仏様に相談しなさいと言われます。すると、子どもたちはお仏壇の前で合掌してお念仏を称えてお願いするそうです。でもあきらめることもあるとのこと。

二人の子供たちは、眞盛上人のご意思の「戒称二門」を無意識のうちにやっているのではないのでしょうか。

頭を垂れ、手を合せお念仏を唱える【形】が心のブレーキの【戒】として作用し、お念仏を繰り返して【称】えることで次第に【心】が整い始め、仏様からは買つてはダメとの返事でも自らを納得させていると思われま。

お仏壇の前で先祖様に手を合せ、お念仏を称えることで「ご先祖様を尊び敬い、お顔に泥を塗るような辱しいことをしない」という戒の気持ちが増え安寧の心へと導かれるのではないのでしょうか。

近年、少年による凶悪犯罪の報道が後を絶たず気持ち痛みます。まるで心のブレーキが壊れているようです。彼らは家族がお仏壇に手を合わせる姿を見たり、自分で手を合わせる経験があつたのでしょうか。

お仏壇に手を合わせる習慣を身に着けるか否かによって、その人の人生は変わるのではないのでしょうか。

合掌

平成三十年 総本山西教寺・宗務所主行事予定

一、修正会

一月一日

一、元三大師御祥当法要

一月三日

一、大般若転読会

一・五・九月十六日

一、宗祖大師降誕会

一月二十八日

一、節分会

二月三日

一、人形供養法楽

三月三日

一、法華千部会

四月五日～七日

一、教学法儀講習会

五月十九日～二十日

一、寺庭婦人・檀信徒・婦人団体合同
研修会 五月二十六日～二十七日

一、天台真盛宗宗議会

六・十二月第三週の予定

一、重陽節句会

九月九日

一、別時念仏会

九月二十九日～九月三十日

一、在家授戒会

十月中旬の予定

一、除夜法要

十二月三十一日

※行事日程は都合により変更すること
もありますのでご了承ください。

大根煮

一月十五日より二月十四日の約一ヶ月間、
食堂にて西教寺秘伝大根煮をご賞味いた
だくことができます。

大根は、食中毒にかかりにくいというこ
とから古来より年の始まりに大根煮を食べ
るとその一年は病気になるいと言われた
ことから、無病息災を祈り食されたと言わ
れております。

ぜひ、年の始まりに一年の家運隆昌、家
内安全、無病息災を総本山のご本尊様にお
参りされ秘伝大根煮をご賞味いただくこ
とをおすすめいたします。

大根煮定食 一、三〇〇円（税別）
大根煮 八〇〇円（税別）

ひな御膳・ひな人形展

二月十五日より三月三日まで、食堂に於
きまして、ひな御膳をご賞味いただいでお
ります。

このひな御膳は子供の成長を祈り食して
いただくお料理でございます。

まず、本堂で息災・健康をお祈りお参り
されたあと、表書院で江戸時代から現代ま
での美術的価値のある人形展をご鑑賞いた
だき、一日ご家族皆様でお過ごしいただき
ますようご案内申し上げます

ひな御膳 二、〇〇〇円（税別）
ひな人形展 四〇〇円（税別）



団体参拝 ありがとうございます

平素は、多数、檀信徒様の総本山への御
登山、御参拝を賜り誠にありがとうございます
ます。

今後共、各末寺の御住職、檀信徒様によ
りよいご参拝がいただけますよう拝観案内
等の充実につとめてまいりますので、たく
さんの御参拝をお待ちしております。

八月

二十六日 伊勢教区半田組新光寺様団体参
拝 八名

十月

十五日 伊勢教区射和組梅林寺様団体参
拝 二十名
二十七日 福井教区東部組長久寺様団体参
拝 三十九名

十一月

八日 伊勢教区小倭上組西向院様団体
参拝 十五名

二十二日 伊賀教区西部組西念寺様団体参
拝 八十名

二十二日 伊勢教区射和組歡喜寺様団体参
拝 二十四名

二十三日 伊勢教区亀山組遍照寺様団体参
拝 六十五名

二十四日 福井教区浜方組西徳寺様団体参
拝 四名

二十五日 伊賀教区南組光明寺様団体参
拝 二十五名

十二月

二日 伊賀教区西部組西蓮寺様団体参
拝 二十七名

表紙説明

阿弥陀如来坐像（本堂）

西教寺本堂の中央に安置された本尊は阿弥陀如来坐
像である。豪壮な本堂に似合った丈六の巨像。拝む人々
を大きく包んでくれるように量感のある仏像である。
寄木内刳り、漆箔、彫眼で定印を結び重厚さを表出さ
せた像である。

お詫びと訂正

宝珠118号 平成29年7月1日発行の一面「真盛上人六字名
号について」竹澤良全師の記事で寺院名に誤字がありました。
正しくは「福井教区浜方組寶樹寺」です。
深くお詫び申し上げます。

発行所 天台真盛宗教学部

発行所 天台真盛宗教学部

大津市坂本五丁目十三一

総本山西教寺内

印刷所 宮川印刷株式会社
電話 大津 (〇七七) 五七八〇〇一三番代

大津市富士見台三十八

電話 (〇七七) 五三三二二四一番